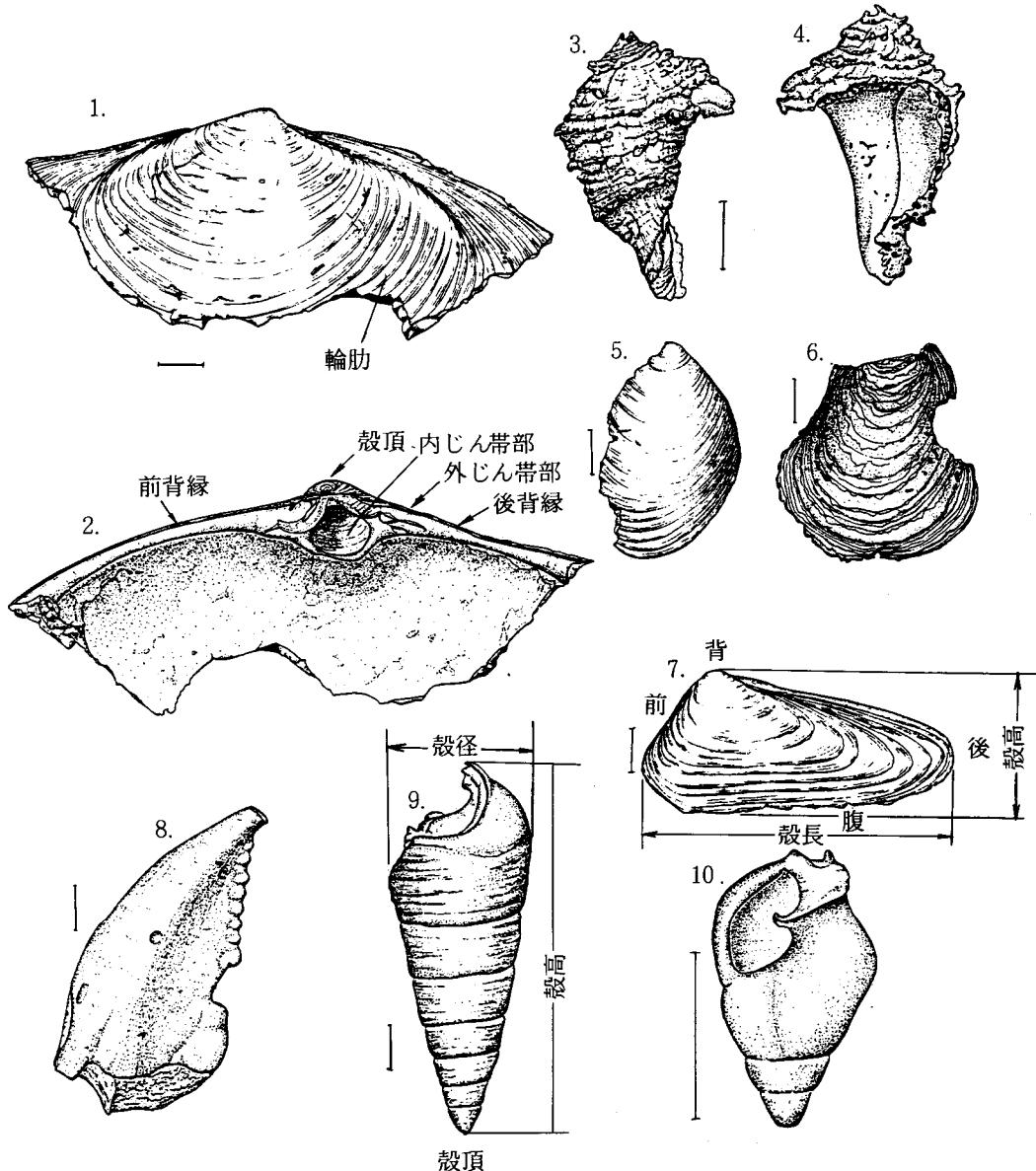


渥美半島高松海岸の化石



(スケール) 1～6 : 1 cm, 7～10 mm

1987. 1 月

協議会ニュース 18号

海食崖の貝化石

(表紙絵)

- ・高松海岸の化石 (辻 伸夫) 表紙
- ・会員紹介 2

私と自然 (中西 正)

- ・特集・郷土の自然 3

矢作川をめぐって (川辺泰正)

- ・観察と研究 6

- 鶴舞公園の鳥 (浅沼秀夫)
- 休耕田の植物 (浅井聰司)

- ・会員広場 8

- コノハズク雑話 (木村 激)
- 駒場池の風景 (荒巻敏夫)
- ある日の自然観察会 (武田芳男)
- 縮少コピーの文化? (鳥居友春)

- ・協議会行事報告 10

理事会 (2.11) 総会 (3.1) 運営委員会 (3.14)

- ・支部だより 11

名古屋支部 尾張支部 知多支部
東三河支部

- ・八事・興正寺のミニ観察会

(東 義己) 13

- ・行事案内・お知らせ 15

行事案内 お知らせ 編集後記

冬の渥美半島、高松海岸は季節風で大波が打ち寄せています。そのドーンという波音は体に響きます。海岸に沿って貝化石を含んだ高さ30m程の崖が遠々と続いています。そこからは、カガミガイやオオノガイなど数多くの貝化石が見つかるところで訪れてみました。貝化石の含まれた地層は帯状になっており、崖下にそれらの貝片を捨することができます。手のひらからはみ出す程大きい二枚貝そして小形の巻貝など、これらを含めた地層を広視野でながめるのは樂しみです。また地層を大きく壊すことなく貝片を含む一握り程の土壤をルーペで見てみましょう。そこには自然の崖と同じような感覚で思いを走らせながらミクロ探検を楽しむことができます。

冬の海岸は自然の音のみ……静かで、化石観察には絶好の季節のようです。みなさんも、いまは化石となってしまった生物や壮大な地層の歴史へ思いをめぐらせてみてはいかがでしょう。

(辻 伸夫)

- 1 オオノガイと思われる
大形二枚貝 (外面)
- 2 同 上 (内面)
- 3 小形巻貝 (粘土のつまつた二枚貝から出たもの) (外面)
- 4 同 上 (内面)
- 5 カガミガイと思われる中形の
二枚貝 (外面)
- 6 偏平な貝 (不規則な輪肋をもつ)
- 7 極小の二枚貝
- 8 カニのはきみ状のもの?
- 9 極小の細い巻貝
- 10 極小の丸い巻貝

私と自然



1 採集時代からの変化

高校に入学して生物部に入り、そこで植物採集の手ほどきを受けた。根掘りの使用法にもいろいろあり、根を掘り取るだけでなく、葉のみの採集にも有用であった。ただ高校時代の初めは、採集対象はシダ植物だけで、それも株として採ることが多かった。採集会の後の胴乱には根のついた株が半分以上占めていることもあった。

その採集も、イワヒバやアオネカズラを乱獲する部員を見て考え方方が変わって来た。高校時代の中端には標本採集だけになり、極力根をつけない採集を心掛けた。自然保護に対する考えはこの頃から生まれてきたのではないかと思っている。

倉内一二先生に直接教えて頂くようになって、生態学的調査を行うようになった。それまでの個体レベルに対し集団レベルでの観察に关心が移った。自然の見方が全く違ってきたわけで、採集は目的でなくなり、採集をしなくても済むことが多くなった。また、それまでのシダ植物一辺倒から植物全般を観察対象にするようになった。このため、協議会でよく言われる「採らず生きた姿の観察」という考え方方はわりと素直に理解できた。

自分の中のこの変化は進歩（進化）だと思っている。野外科学が博物学・分類学から系統進化・生態学と変化してきたように、個人でも同様の変化があったものと思っている。ただ時として以前の採集が主であった頃の郷愁が頭を持ち上げて来る。採ってもいいのではないか、採らなければ分からぬのではないか、という考えは一種の先祖返りなのだろうか。

2 原体験の頃

住んでいた豊橋市の郊外は田舎であった。家の間に点々と畠が残り、10分も歩けば田が広がり、小川が流れていた。幸いなことに、そんな環境が遊びの舞台だった。魚を素手で捕る感触も、イナ

中西 正（副会長）

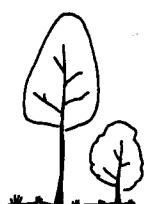
ゴを追う時のイネの嗅いも、ホタルを見に行った時の暗闇の恐ろしさも覚えている。その遊びの舞台も、今は住宅と競技場に変えられた。田舎と街の接点で、時代的にも高度成長期の前に子供時代を過ごせたことは幸福だった。

時代の転換期に子供時代を過ごした我々の世代は、その体験を子供に伝えようと努力する人が多いようだ。休日に子供を郊外に連れ出し、カブトムシを捕えたり、山歩きをしたりする。その努力は大切なことと思う。ただ自分たちは遊びの中に自然があつただけに、自分と同じ体験をさせることはできないことであろう。自然環境を求めて住居を郊外に移しても、理想とする環境は5年ともたない現代においては、自分たちが経て来た経験のみにこだわることには無理があるのでないだろうか。

3 生きた姿の観察のために

先程「進化」なる言葉を使ったが、生物の進化はそれに先立つ環境の変化によることが多い。我々を取り巻く自然環境が変化すれば、自然との付き合い方も違ってくるはずである。自然があふれていた時代には貴重な自然に目が向けられていても、身近な自然が失われつつある時代になれば、まずこの自然に目を向ける必要があるであろう。

「採らずに生きた姿の観察」は現代にあった自然との付き合い方だと思う。この考え方は、自然が豊かであった時代でも有効であったはずだが、この時には育たなかった。博物学の系統はあったがナチュラルヒストリーは今始ったばかりである。協議会のいう考え方を伸ばしていくには、今までの体験はそのままでは使えないのではないだろうか。人間誰しも育ってきた中でしか考えられないようであるが、この際頭を柔軟にして、体験からではなく、新しい考えを持って自然との付き合いを追求する必要があると思っている。



矢作川をめぐって

執筆 川辺 泰正

はじめに 川についての意識

川に対する人びとの意識や考え方は住む場所、年令、職業などによってさまざまである。私は矢作川の近くに生まれ、育ち、現在もそこで生活していることから、ことのほか川への関心は強い。全国の人びとはどう考えているのだろうか。この点について総理府が61年夏に「河川と土砂害」という世論調査を実施し、興味深い結果が朝日新聞に要領よくまとめられている。

—「美しく」「遊べる」川に根強い要望—

総理府では、昨年8月1日から7日にかけて「河川と土砂害」についての世論調査を実施した。20歳以上、3千人が対象。その中から、いくつかの結果を紹介しよう。

「川」という言葉から、どんな場所や風景、情景を思い浮かべるか。川のイメージを、12項目の中から選ばせた。(複数回答)

「自然のある川」との答えが4割近くあった。とくに町や村に住む人は、半数以上がこの情景を選んだのに反し、11大都市の人たちは2割そこそこしか選ばなかった。川や土手、河原と人間とのかかわり方は、どうあるべきだろうかの質問に対し「土手や河原で、水とたわむれたい」とか「野鳥や昆虫の観察など自然とのふれあいの場所とし、川辺へ行きたい」という要望が多い。しかし、最

近、実際に土手や河原へ行ったことのあると答えた人は4割弱。「川の水がきたないので行かない」という人も少なくなかった。それでは将来、河川の姿はどうあるべきか。6項目の中で、6割強が「きれいな水が流れる川」を挙げた。緑や自然を川に求める人、子どもが安心して遊べる川を望む人も多かった。(下図参照)

また、水害の原因としては、流域の開発が影響を及ぼしているとみる人が半数以上おり、森林や土地開発の制限を強化する必要があるという人が7割強いた。(朝日新聞昭和62年1月3日付木曾三川改修100年特集版より)

1 川のイメージ

緑の丘 風

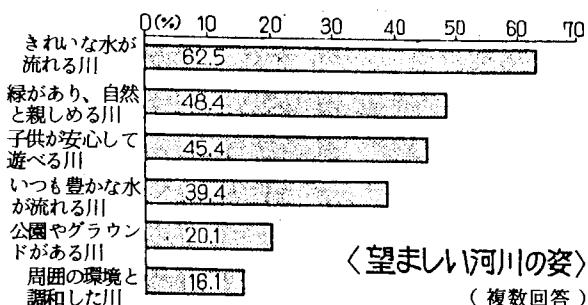
白い山 新しい朝

川は流れ 川は光る

新春の朝、いつもの矢作川の堤防からは猿投山の東に御岳山がくっきりと白い姿をみせた。さらにその東には中央アルプス、恵那山、矢作川源流部の山々、愛知高原が連なっている。工場の煙もとだえた正月の空はことのほか澄みわたり、すがすがしい。こんな時には年に数回の加賀の白山も望むこともできる。矢作川はゆったりと光り輝きながら流れ、川原にはカルガモやユリカモメたちが羽をやすめている。これが私の住む岡崎市の中心部に近い矢作橋付近からの冬の風景であり、矢作川のイメージを一編の詩にたくした。そんな折、ふるさとの川・天竜川と同様にこよなく矢作川を愛し、「ミスター矢作川」として、流域定住圏づくりに情熱を傾けられた伊藤郷平先生(元愛知教育大学学長)のお姿が浮んだ。

2 伊藤郷平先生の思い出

「西三河は矢作川です。矢作川を知ることこそ



が西三河の地域づくりの基本です。流域は一つです。と先生は強い信念で語ってみえた。ここに先生が遺された一冊の本がある。「矢作川流域シリーズNo.1－矢作川流域1万年の歴史と文化を探る－昭和55年、矢作川流域開発研究会」。そのあとがきに先生は次のように述べられている。

……ご覧のようにこの冊子は座談会の記録が中心である。こうした座談会の記録はいわばデッサンにすぎないが、題材をひろうにはこと欠かないだろうと思うので、今後も引き続きNo.2、No.3として続刊したいと考えている。現代の悲劇は川と人間がきれてしまったことである。これをとりもどすために努力がなされているが、復縁は容易ではない。

先生はこのシリーズを発展させ、将来は「矢作川文庫」にしたいと念じつつ、昭和59年に他界された。おそらく続編には矢作川の自然や人々の生活像を描いてみえたことであろう。

この矢作川は、源を中心アルプスの南端、大川入山付近に発し、長野、岐阜、愛知の3県の水を集めて三河湾にそそぐ、流域面積1830km²、本流の延長117kmで、県下では木曽川に次ぐ大河川である。

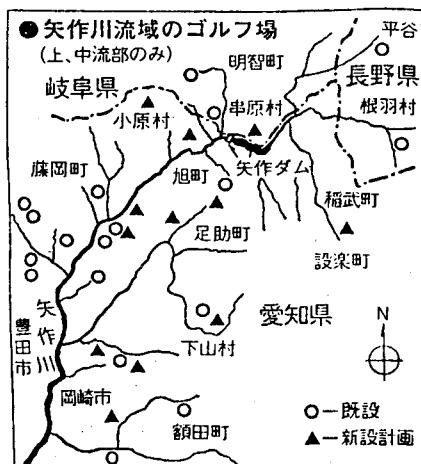
3 流域の開発と保全

「エジプトはナイルの賜物」といわれるよう古代より川は文明をはぐくんできた。矢作川にも河床遺跡が発見されている。私たちの生活に水はかけがえのない資源であり、川の自然や風景はやすらぎと潤いを与えてくれる。身近な川は親しみやすいフィールドであり、川を知ることは流域を知ることであり、浄化意識や自然保護思想の普及にもつながるものである。最近では河川改修がすすめられたり、安全性が優先されて、子どもたちが川で遊んではいけないという観念が浸透しているようだが、もっともっと私たちは身近な川に眼を向けてよいのではないか。先生はそうした点も憂慮してみえたのであろう。

最近の地域づくりで「ウォーターフロント」ということばがはやりである。「水辺空間」の整備すなわち水に親しめるまちづくりといった意味である。ようやく人びとが潤いのあるまちづくりに水が欠かせないものであることに気がつきはじめ

た。建設省は昭和62年度からはじまる「第7次治水5年計画」で河川を積極的に開放する考えであり、「うるおいとやすらぎのある水辺環境都市の拡大」をテーマの1つとしている。豊田、岡崎、西尾市など矢作川流域にはその候補にふさわしい都市がたくさんあると思う。また、木曽三川についても改修100年を迎える、木曽三川国営公園の整備が急がれている。

次に矢作川流域の開発状況をみると、上流部では図に示すように、ゴルフブームを反映してゴルフ場の増加が目立つ。矢作川上流部は、カコウ岩質のため、風化しやすい土壌で崩土をおこす危険性をはらんでいる。過疎化対策の一つとして、ゴルフ場のもたらす雇用等の経済効果と自然環境の保全という二律背反のテーマをいかに調和させていくか、これからも続く課題である。



中下流域においては、都市化や工業化の進展に伴って下水道基盤整備が遅れ、中小河川の汚染は依然として続いている。

また、矢作川河口に近い碧南市の臨海部には昭和63年から碧南石炭火力発電所が建設されることで注目されているが、この付近はシギ、チドリ、カモなどの生息域としても著名な所であり、魚釣り場や野鳥生態観察のための緑地帯が設けられる計画である。環境対策が考慮された開発の好例といえよう。矢作川流域はいまもってすぐれた自然環境を残してはいるものの、このように土地利用価値が高く、今後も工場立地や住宅化が促進される地域であり、まさに伊藤先生が指摘された、開

発と保全の調和について、今まで以上に真剣に考える必要がある時期にさしかかっているように思う。

そういうば、つい最近、後述する矢作川自然観察会を開催した岡崎市の左岸の観察地も護岸工事により、その姿を消してしまった。川の中でも浸食をうけやすい攻撃面にあたり改修もやむをえない箇所ではあったが、私の秘密の場所のカワヤナギはもうみることはできない。川面を飛翔していたカワセミもそのすみかをどこへ移したのであろうか。こうした観察の適地は改修の際に自然を生かしたミニ河川敷自然観察公園のような形でも整備していただけることを望みたい。

「開発と自然環境の保全」というテーマに対して私たちのさきやかな自然観察会活動は解を与えるものではないが、身近な自然を通して少しでも自然の大切さを理解してもらえば成果であると思う。一人でも多く自然を愛する人が増えれば、それが大きな力となっていくのである。

4 川の自然観察

都市域の河川は殆んど二次的な自然ではあるがそれでも水辺へ集まつくる鳥たちをはじめ魅力的なフィールドである。ゴミ処理場周辺でさえ注意深くみると多彩な生物の生態を観察することができる。

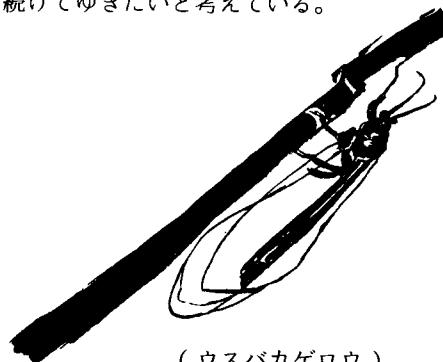
私たち西三河支部ではこれまでに・矢作川河口の冬鳥の観察会（58年）・六所山自然観察会（59年）、猿投山自然観察会（60）・香嵐渓自然観察会（61）・矢作川自然観察会（61）など矢作川流域の上流から下流にかけて各地で観察会を実施してきた。ことに昨年の12月に行った岡崎市の国道1号線矢作橋付近での観察会は身近な川をテーマに市街地のなかの自然を学ぶことを主目的に行つたものである。そこでは、①川のあらましと構造、②川辺の鳥や植物、③川と人びとのくらし、④川の自然観察の方法を中心にテキストを作成し、観察会を行つた。26名の参加者の感想では、・まちのまん中にこんなにも多様な自然が残っていることに驚いた。・こんなところにこんな自然観察の場所があるとは知らなかった。・川を学べてよかったです。・水辺の鳥が観察できて楽しかったなどが寄せられた。このように身近な河川が意外



に知られていないことがわかるとともに、川についての関心が高いことも示すものであった。

このことは協議会ニュース（17号）に紹介された「身近な自然のアンケート結果から」のなかでもうかがうことができる。河川やため池の保全の必要性が指摘され、河川敷の利用法や護岸方法などの管理の仕方への意見も多くだされている。また、身近な自然が大切な理由で重要なものについて河川が果たす役割の重要性が示唆されているようと思われる。

名鉄電車の枇杷島の庄内川鉄橋からは御岳山や伊吹山、白山を遠望することができ、鉄橋下の川原にはユリカモメやカモ類たちが矢作川以上に多く集まっている。ここも矢作川と同様に身近な観察適地といえようか。大太平洋側は干潟が多く、渡り鳥の飛来地が広く分布しているが、愛知県はそのなかでも上位にある。すなわち河川を中心自然観察の適地が多いことを示している。私どもではこうした状況をふまえて、西三河の矢作川流域を中心に今後も上流から下流へ、四季を通じて観察会を行い。少しでも西三河の自然を学ぶとともに、自然や川への愛好者をふやしていく努力を続けてゆきたいと考えている。



（ウスバカゲロウ）

鶴舞公園の鳥

浅沼秀夫（尾張旭市）

私は勤務先の近くにある鶴舞公園へ毎朝30分程鳥を観察しに行きます。そして、62年1月末で2950回ぐらいになりました。

この間11年8ヶ月（1ヶ月平均21回）が経過しました。

観察した種は117種（野鳥のみ籠抜けは含まず）となります。しかしそれはさほど重要な事であるとは思いません。

都市砂漠の上空を通過する渡りの途中、下界の光に惑わされ、不着陸する者も、あろうことは、渡りの季節夜間曇った日の朝、それらしき種の多いことでもうなづけます。

それらの受入のための縁やそのために種の多いことも悪いことではありませんが、やはりそこで生活する平凡な鳥が平凡に居り、ナンテンや、クロガネモチの実が食われてなくなるような状態こそが肝要であると思います。

下記の表は、この公園で観察し始めてからの平凡な種のおむねの量的推移です。

これにより、その環境の変化もご推察いただけるものと思います。

言うまでもなく鳥は（生物は）その環境に適した種が適した量、その環境に変化を与えつゝ生活

しています。（そうあるべきです）

しかし残念ながらこゝでは人間の影響力がほとんど他の生物が入り込む隙きはありません。

人間が与えた環境に、適した種が適した量、生活している場所と言えると思います。

ドバトが多いか ヒヨドリが多いか？

現に鶴舞公園の鳥達を、年間を通じ量的にとらえた場合、ドバト、キジバト、ムクドリ、ヒヨドリ、スズメだけで90%を越えると思われます。

彼等が鶴舞公園の主役です。彼等に共通な点は、……………これぞ我々の主観も含めて、我々人間に対する。大いなる皮肉であるのかかもしれません。千年も前「枕の草子」でウグイスによせて清少納言は庭園を批判しているが（第三十八段、鳥は、）これは当時と較べ今では途方もなく大規模となっている現象であろう。

自然の一部を見るのでなく「あるがまゝにその仕組を観る」これは日本古来の文化である「花鳥風月」の心と軌を同じくするものではないかと私は思っている。（最近気が付いた）

公園に美しい鳥たちが舞い遊ぶのは何時のことであろうか。

明らかに減った鳥	おおむね同じくら いの鳥	明らかに増えた鳥
モズ	スズメ	キジバト
キセキレイ	ヒヨドリ	マガモ
ウグイス	ムクドリ	エナガ
アオジ	セグロセキレイ	ハシブトガラス
シロハラ	メジロ	
トラツグミ	ツグミ	
ツバメ	ハシボソガラス シジュウガラ ドバト	

休耕田の植物

浅井聰司（名古屋市）

県の委託による自然観察の手引を書くために、休耕田の植物を方形枠により調べてみました。調査は、春日井市高蔵寺町と名古屋市守山区吉根の2カ所で行いましたが、ここでは自然観察の手引にはスペースの関係で載せられなかった春日井市の結果をまとめてみました。

植物の種類は、その場所の水分などの条件や人間の手の入る頻度などにより様々に変ってきます。

耕作田では、春はスズメノテッポウやタネツケバナの群落が、夏にはイネー色に変わります。

休耕田では、セイタカアワダチソウの群落となりますか、水分が多いとガマが優勢になります。

全体的な傾向としては、耕作田では1年草の水田群落から、休耕田となって時間がたつに従って多年草や帰化植物が増えてくるようです。

月日	耕作田（湿田）	耕作田（乾田）	休耕田（乾田）	休耕田（湿田）
4.2	タネツケバナ 24 スズメノテッポウ 18	スズメノエンドウ 32 レ ン ゲ 8 タネツケバナ 5 コオニタビラコ 2 ハハコグサ + イネ科 +	セイタカアワダチソウ 21 ヤハズエンドウ 6 オオイヌノフグリ 4 ジシバリ 4 ハルノノケジ 1 ヒメスイバ 1 チドメグサ +	セイタカアワダチソウ 13 ガ マ 4 タネツケバナ 4
5.5	スズメノテッポウ + その他の 1種 +	レ ン ゲ 5 チドメグサ 5 コオニタビラコ 4 キツネアザミ 1 ハハコグサ 1 ムラサキサギゴケ 1 ノミノフスマ 1	ヤハズエンドウ 35 イ科 SP(メヒシ類) 29 バラ科 SP 10 セイタカアワダチソウ 8 チドメグサ 2 キ科 SP(ジハリ類) 1 セリ科 SP + コオニタビラコ + その他の 1種 +	ガ マ 23 セイタカアワダチソウ 18 イネ科 SP 16 ノミノフスマ 6 セリ科 SP 4 スズメノテッポウ 3 ツルマメ 3
8.16	イネ 100 アオウキクサ +	イネ 100 ウキクサ + チドメグサ + コナギ + ツユクサ + その他の 3種 +	イネ科 SP 48 セイタカアワダチソウ 34 チドメグサ 6 スイバ 4 チゴザサ 3 キ科 SP(アザミ類) + キク科 SP + その他の 6種 +	イネ科 SP 43 ガ マ 26 ヤブマメ 14 セイタカアワダチソウ 6 チゴザサ 3 ツユクサ 2 セリ科 SP 2
9.28	イネ 100	イネ 100 コナギ + アオミドロ + チドメグサ + ミズワラビ + アゼナ +	イ科(エノコロクサ類) 38 セイタカアワダチソウ 33 カヤツリグサ 14 イヌタデ 5 アメリカセンダングサ +	ガ マ 26 ヌカキビ 15 ケイヌビエ 14 セイタカアワダチソウ 7 コブナグサ 3 ヒメクグ + ムラサキニガナ + セリ科 SP + イネ科 SP +

調査 1986.4~9(4回)春日井市高蔵寺町気噴

(単位 %)

会員広場



コノハズク雑話

木村 滋（新城市）

秋。あちこちの高い山々から紅葉の便りが届くようになると、一抹の不安が私の脳裡をかかせる。それはコノハズクの消息が心配だからである。

南へ帰る鳥、北から渡る鳥のニュースの陰で、数行の記事と小さなコラム欄に悲しいコノハズクの受難の報告、（9/23豊川市10/13新城市）。鳴けば鳴いた!! "なぜ鳴かぬ仏法僧" とマスコミは勿論、観光業者まで騒ぎたてる。この夏はそんなことで観光立地の奥三河は淋しい年であった。

コノハズクはもういない？悲報とは別にコノハズクは生れ育った故郷の山へ必ず戻って来ているのである。現に新豊根ダムでは生息の報告がある。

県の鳥であるのにその生態が不明のため、一般には関心が少なく、鳴く鳴かぬ云々を問われるのは酷であろう。

コノハズクが鳴かなくなつたということは人間が彼等の聖域を犯したものと思われる。即ち、昔は忌み木といって絶対伐らぬ習俗があった。コノハズクはこうした老樹で繁殖したものと思う。が、林業経営の近代化のためこうしたものは無視され、深山を除き殆んど人工植林に代ってしまった。

私はかねてからコノハズクに興味をもちらながらその機会に恵まれずいたところ、たまたま鳳来寺山自然科学博物館の松井館長がその造詣が深く、門を叩いて5年、種々研究指導を受けようやく片目が開きかかったのである。たまたま59年秋、M町の小学生が捨ったコノハズク保護指導に同行することになってじかに生体に触れる機会を得た。

小型鳥とはいえ、猛禽類の仲間、嘴や爪は鋭い。人肌に似た温かさ、特別構造の風切羽のせいか柔軟な翼は羽搏き音もない。これでは狙った獲物も一溜まりもないだろう。渡り鳥といわれていたがこの身体構造では海を渡って南国へは行けぬこと必至。無霜地帯の越冬も可、（研究家の調査報告による）。

鳳来寺山の懐しい鳴き声が聴けないので、博物館の資料10数ヶ所のコノハズクの里を求める旅をしたことがある。何れも環境庁鳥類繁殖分布図のA Bランクの2ヶ所、（山梨・四尾連湖、岩手・竜仙洞）何れもコノハズクの棲息には好環境の場所であり、地元では「ブッポーソーと鳴く鳥はどんな鳥？（山梨）、オッドン（コノハズクのこと）が鳴いだで種蒔き」と全く関係がない。騒ぐのはこの奥三河だけ、以上2ヶ所を訪ねたが何れも民俗的にいう樹木信仰の神木とか忌木に棲息しているが、宿舎で夜を徹して聴いても鳳来寺山の鳴き声には叶わないでのある。

本年6月中旬T Vの取材で松井館長と鳳来寺山へ登山し夜を徹し鳴き声を待ったが鳴かなかった。近年特に開発著るしい新城市街地の照明か、はたまた観光目当てのバス登山の騒音かは不明である。

何はともあれ鳴かなかつたことは確か。秋から冬へののはざま、10月から11月初旬にかけて受難のコノハズクの報告はあるだろう。毎朝新聞の頁を繰るのが恐ろしい。移動に失敗し、幸いに捨てられて動物園に保護されても野性は野性、決まった餌しか与えられず自然環境にあるような自由は剥奪され、ストレスにより鳥類としての天寿を全うすることは困難であろう。

ここ奥三河でも最近マツノザイセンチュウによる松枯れが奥へ奥へと侵入し、緑と紅葉の間に所々目立つようになってきた。

来春にはおそらく、行政官庁や林業家は松くい虫防除のため薬剤の空中散布が行なわれると思う。このような事態になったとき、生れ故郷へ帰り着いたコノハズクは勿論、他の野鳥たちの餌となる昆虫は絶滅してますます奥深く繁殖地を求めてやがては鳳来寺山系から姿を消す結果となることと思われる。

この稿を閉じる時点では未だコノハズク受難の報告は聴いていない。どうか無事移動を終ったコノハズクよ!?、無霜地帯の人々は樹木信仰により危害を加えることはない。巨樹の樹洞には越冬する昆虫は数多くいる筈。ゆっくり越冬してほしいものである。

（61.11.10記）

駒場池の風景

荒巻敏夫（一宮町）

先日、久しぶりに豊川市の“水がめ”となる駒場池を訪れる機会を得た。

昨年までは、勤務校への通勤にこの駒場池の山道を利用していたので、時折シカ、サル、リス、キジなどを見かけることもあり、その出会いにはいつも新鮮なものを感じていた。

昨秋、この人口湖も渇水のため、湖底から、小径や小川にかかる橋などが顔を出しあり、飛来してきた多くの冬鳥にとっては、厳しい冬を予期させるものがあった。

ところががらんの暖冬、多雨のため、この時ばかりは豊かに水を湛え、マガモ、カルガモ、コガモなどが、悠々と湖面に遊び、訪れた私の心を十分になごませてくれた。

レンズ越しに映し出されるマガモの、陽光に輝く鮮やかな緑。これこそ野生のみに与えられる、自然が鍛え上げた色彩と艶そのものであり、本当に美しく、いつ眺めても新たな感動を覚える。

さて、この湖には知る人ぞ知る、オンドリもやって来る。年によってちがうようだが、私が数えた時など実に10ペアを軽く超え、そのどれもが若いカップルの如く、よくはしゃぎ、湖面に水しぶきを上げていた。比較的静穏にすごす他の水鳥たちとは対照的であり、また趣がある。

いつも思うのだが、私たちは身近な自然の営みに触れることによって、心豊かになれる。こんな自然をいつまでもそのままの姿で残しておきたいものである。

ある日の自然観察会

武田芳男（豊橋市）

私の勤めている動物園には、動物園友の会という集まりがあります。先日そこで、冬の自然観察会を行いました。動物園を出て周囲の畠、たんぽ、川などで生きているものたちを観察に出かけたの

です。生き物たちの冬越しの仕方ということで、カマキリの卵、テントウムシ、タンポポの葉などが冬の寒さにどの様に耐えて、やがて来る春への準備をしているかを見て回りました。

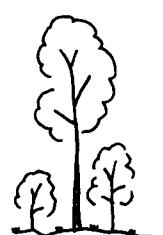
このときに、道具として、スコップを持っていました。何をするためかというと、たんぽで越冬しているはずのザリガニを掘り出すためのものです。たんぽのふちを歩きながら穴を捜すと、あちこちに見つけることができます。それで、スコップの登場となるわけです。しかし、何回掘ってもザリガニが出てきません。ある女の子たちは、長い穴を素手で掘りだしたりしましたが、それはどうやらモグラの穴のようでした。そんなことをしているうちに歓声があがったので、直径3センチもある穴の主が現れたかと覗いてみると、長さ4センチほどの小さなザリガニでした。たんぽの中に穴はいくつも見つけることはできるのですがとうとう大きなザリガニは見つけることができませんでした。でも、何度も何度もやってみて、参加したひとたちにもおもしろい体験になったような気がします。出てこないザリガニに挑戦するということも大切なことのような気がした1日でした。

縮少コピーの文化？

鳥居友春（碧南市）

昨年の12月、初めて盆栽の講習会に出席する機会を得ました。正月用に松竹梅をはじめ、南天、福寿草、岩鏡等を直径50cmほどの浅鉢に寄せ植えして床の間のかざり物にするのです。

作風に名古屋風、関東風、関西風があるそうで、この日、教わったのは主木を梅に、副本を松にする関西風でした。全面に苔をはった山や島、寒水石とよばれる小石をひきつめた海や川で鉢の中に小さな海岸風景を表現するのです。出席者それぞれに、自然観を思い浮かべるのに苦労しているようでした。



古人は自然をよく愛したといわれるが本当であろうか。日本庭園、盆栽、生花等広大な自然からほんの一部を切り取って、身近に縮少コピーしたものではないか。昔は多くの山が靈山、神山とさ

れ、入山者を拒んできた。ところが、こうした信仰がうすれ、交通が発達すると多くの登山者で山はにぎわいだした。高山植物や草木が持ち出されるといったニュースの新聞にのるのも、日本の縮小コピーの文化?が原因しているのであろうかと考えつつ寄せ植の手を動かした一日であった。

リレー投稿は、投稿者が次の投稿者を指名し、順に続けていくものです。(内容は自由)
次回は、岩瀬直司、戸河里光雄、石黒泰宏の3名の方にお願いします。(字数500字程度)
また、会員広場への自由投稿もお待ちしています。(送付先:越湖信孝)

協議会行事報告

2月11日 理事会 (於中少企業センター)

出席者12名。主として3月の総会の議案についての検討を行いました。

話題としては、県外で行われる研修会等に、旅費の一部を助成して、協議会から派遣してはどうかとの意見があり、運営委員会で検討することにしました。また、現在行っている調査はとりまとめ期限をつけて一応終了することになりました。

3月1日 総会 (於産業貿易館)

1号議案 昭和61年度事業実績。2号議案 昭和61年度収支決算。ともに原案どおり承認されました。なお、収支決算に関して監事から、支部に配分している経費については合理的な経理を行うよう意見がありました。

3号議案 役員の選出。任期終了にともなう役員の改選も理事会原案どおり、次の方々が再任されました。

会長 大竹 勝

副会長 竹内 哲也、中西

監事 水鳥 富人、岩崎 龍生

4号議案 昭和62年度事業計画。第5号議案 昭和62年度収支予算。ともに原案どおり承認になりました。昭和62年は、協議会としては特に新しい事業は考えず、会の運営の充実、会員への情報提供に力を入れることとしました。なお、研修会については、回数・内容ともに充実させる計画です。このため、年間に理事会4回、運営委員会8回開催する予定です。

総会終了後は、次の活動等の発表を行った。盛りだくさんでしたため、発表者には時間が少なかったようです。

① タンポポ調査の結果 (佐藤国彦)

帰化種、在来種の県内分布状況について

② セミ分布調査の結果 (鈴木友之)

主要種の分布、ぬけがら調査の結果

③ 善師野自然観察会の結果 (富山 茂)
61.11.9の県委託観察会の企画、運営、指導に際して工夫したことなど

④ 伊良湖岬自然観察会の結果 (中西 正)
61.10.5の県委託観察会の指導ポイント、指導方法など

⑤ 自然観察の手引関連調査結果 (津島孝子)
帰化植物率、一年生植物率をいろいろな環境で方形枠を用いて調べた内容

⑥ 自然観察の手引関連調査結果 (浅井常典)
ケリの生活を年間を通して観察したようす

3月14日 運営委員会 (於名古屋市教育館)

出席者9名。①運営委員会内の役割分担を次のように決めた。

委員長 佐藤国彦 副委員長 北岡明彦
観察会担当 鈴木友之、研修会担当 斎竹善行
情報担当 国枝利満

②62年度事業について検討した。自然観察会の運営マニュアルをつくることを決め、各研修会の内容について意見交換を行った。なお、今後の課題として委員会で検討することに、自然観察会の100回記念行事(63年)、観察の手引等印刷物の発行、63年度以降の調査事業などを予定した。

③自然観察会の案内チラシをつくることとした。

④各支部の行事結果の報告。⑤昭和59年~61年に行った自然観察会のテキストを集め、項目別に再編集したもの(B5版P.170)を作りつつあり、各支部へ2部ずつ配布することとした。また希望者には実費430円でお渡します。

(申込先:佐藤国彦)

支部だより



名古屋支部

1.15(祭) 自然観察会下見、新年会

庄内緑地公園は、一級河川の庄内川の河川敷にあり、名古屋市内最大の公園緑地として整備が進められている。すべて完成されれば市内でも良好な公園の一つとなると思われる。

下見は、7名の支部員で、テーマ等の確認を行った。

下見が終了後、上前津へ移動して新年会を行った。(8名)飲みながら、自然観察指導員らしく自然に関する話が続出した。特に、都市住民の自然に対する見方や保護の考え方方が地方の居住者とどのように違うかについていろいろな話が出た。

2.8(日) 庄内緑地公園自然観察会

この日は天気も良く、暖かい一日であった。参加者は、ボーイスカウト40名、一般28名、計68名であった。初めて参加した方が多く、ほとんどが新聞のお知らせで知ったということで、久し振りに新聞に依頼した効果があったといえる。結果は自然度の低い都市公園にしては好評で、次回も是非参加したいとの声も聞かれた。

また、参加者の中に、この場所を昔から知っている者の意見として、自然をもっと残した形での公園づくりが必要であると言われたのが印象に残っている。あまりにも管理され過ぎた公園も面白味に欠けるものである。

ボーイスカウトは、地元の団員であったが、生物の少い場所でもあり、非常に指導しにくかったという意見もあった。

なお、観察会終了後、名古屋支部の総会が行われた。

1.21(水) 月例会

「ボーイスカウトの活動について」というテーマで佐野さんが話をされた。ボーイスカウト等も昔に比べると、自然愛護ということが強調され、自然に対して多くの配慮がなされるようになったが、自然との接し方、運営の仕方に何か物足らなさを感じる。

(石田 肇)

尾張支部

自然観察指導員のみなさんこんにちは。各支部で行ってきた自然観察会もずいぶん回数を重ねてきました。でも、指導メンバーが増えていかないとか、一般参加者の継続参加やその輪の広がりを得ることができることができる程の指導内容や方法が十分できていない。などの問題も出てきています。より多くの指導員がその資格を発揮されますように、秋の自然観察会について報告します。

- 日時 昭和61年11月9日 10:00~14:30
- 場所 犬山市の名鉄広見線善師野駅北側

ここでは支部の月例観察会も行っており、一般募集による観察会も何度も行ってきました。でも今回も事前の下見を数回行いしっかり準備しました。この際、指導のポイントを決め、指導員相互に教え合ったことを地図や手帳にメモをしました。さらに、観察のポイントや説明内容と方法を示したプリント、指導者用テキストや資料集を手に前日に最後の学習会を実施。当日は、2、3人の指導員が10人程のグループを担当しました。グループの構成も親子連れ・中学生・大人となるべく分けるようにして編成し指導がしやすくなりました。そして当日の朝、参加者が知りたがる植物名・指導上出てくる植物名は名札をさげておきました。あとは、各指導員の持ち味を生かしどんな指導をするかです。

当日の空は曇りでした。でも、79人の参加があり、数年ぶりの紅葉を楽しんだり自然のしくみの学習を深めました。内容は次のようなものです。

- 道ばたや土手の植物 (しめり気と植物・帰化)
- 虫や鳥の仲間分け 植物・種の散り方)
- 地質や地形と土地利用
- 実のいろいろ ○ 林のつくり
- 紅葉のしくみ (アラカシ・アベマキ・)
- 森ができるまで ヒノキ・竹の各林)
- 落ち葉のゆくえ ○ 池と動物
- 森のはたらきなど

参加者の多くが満足してくれていたようであった。また今日は、犬山市の協力でかわいいバッグや図かん、そして、会員からも野鳥のすばらしい焼き物の提供をうけ好評であった。(山本尚三)

知多支部

私たちは、自然界の動植物を相手に『自然観察』をしているつもりになっている。が、本当は、逆に『マンウォッチング』されている。と、感じたことはないだろうか。12月14日の、大池公園での野鳥観察は、ふとそんなことを考えさせられた半日であった。

午前9時30分、くもりのち小雨、野鳥の会の会員とあわせても参加者数名。天気のせいもあってか休日というのに園内は人影まばら。林の鳥、水辺の鳥、どちらも、なんとなく息をぬいたようにほっとした様子が伺われる。観察できた鳥は、ヒヨドリ、ツグミ、ハクセキレイ、ジョウビタキ、カルガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ、ユリカモメ、コサギ、ゴイサギ、メジロ、エナガ、シジュウカラ、シメ、ウグイス、カワウ、アオジ、モズ、セグロセキレイ、キセキレイ、ハシホソガラス、カツブリ、ムクドリ、キジバト、ドバト。以上25種類を確認。思った以上に数が多かった。これは人間たちが、鳥たちの生活圏の中にはいっていった。ということであり、人間の数よりもはるかに鳥の数の方が多いということは、近頃よくあるサファリパークのような気持ちをおこさせた。

さて、マンウォッチングされている私たちは、マナーを守っていたらうか『彼ら』に笑われてしまいか、と、少々気になる昨日今日である。

アウトドアライフ、という言葉が、ファッショング感覚でつかわれる新人類文化。真新しい道具を車に積み、野山に都会生活をもちこんで、それで自然にふれた、とカンちがいしている近頃のおそまつな自然に対する情報があふれている雑誌。これには腹立たしささえ感じる。さて、知多支部も新年をむかえ、次年度計画立案のシーズンがやってきた。17名という多くのメンバーが頭をつきあわせて考えたテーマは『五感をみがく』夜の室内例会は、どうしても机上の論になってしまいがちであるという反省から、夜でなければできないこと、も考え合わせてみよう。の声自分から外へどんどんでかけて、感じ、考えることが、指導員としての糧になっていくことを信じて、目が、鼻がとき澄まされる年にしたいものである。(竹内秀代)

東三河支部

61.11.30 豊橋公園自然観察会

(参加:会員 12名、一般 29名)

抜けるような青空が広がった30日、ナンキンハゼの白い実が映える豊橋公園で、冬越しの準備を整えた樹木を中心とした観察会が開かれた。

ナンキンハゼの他、エノキ、センダンなどの木の実やまだ米粒ほどの大きさのサクラの冬芽を観察したり、葉の落ちたエノキに寄生するヤドリギのしぶとさに目を見張るなど、「新しい発見」ができたようである。また「木の名の語源」の紹介などもあり、興味深かった。冬枯れの公園は、四季の中でも一番自然のありのままの姿を見せてくれるようだ。

○ 観察した木の実

ナンキンハゼ・エノキ・センダン・ムクノキ
イチョウ・ザクロ・クスノキ・アラカシ

○ 変わった種子の観察

イヌマキ・イチイ・ケンポナシ

○ 冬の花の観察

ザザンカ・ヒイラギ・ヤツデ・ビワ

62.2.8 豊橋公園自然観察会

(参加:会員 11名、一般 42名)

5回計画の豊橋公園での自然観察会の最終回。当日は、真冬とはいえ大変暖かく、参加者も多く盛況であった。冬の樹形、ヤドリギの観察、こも巻きに集まる生物の観察を行った。こも巻きから出てきた虫は、ゴキブリの仲間29、鱗翅目の幼虫16、テントウムシなど7、クモ類64、ワラジムシなど多足類92でした。(調査樹木5本、調査期間11月30日～2月8日)

○ 地域の出来事

10月末 湿美半島の小塩津、遠州灘沿いの海岸に
10数年ぶりにハイイロガシの若鳥が飛来。
仲むつまじい所を見せ、野鳥愛好家の目を
楽しませた。(11/11付朝日新聞より)

11/4 国の天然記念物に指定されているコクガ
ンが豊橋市神野新田町の遊水池に飛来して
いることが観察される。

(伊藤悦子)

八事・興正寺でのミニ観察会

名古屋支部 東 義巳

1 経過

昭和61年度の名古屋支部幹事会で、自然観察会などの行事計画を検討していた際、年間を通して同一地域でミニ観察会を行ってはどうかとの提案がありました。名古屋市内及び近郊で交通の利便性がよく、自然環境が良好な鶴舞公園・名城公園・興正寺公園・猪高緑地などが候補地としてあがりました。いろいろ検討した結果、最終的に昭和区にある興正寺公園が決定され、私が統括者となりました。

毎月1回開催する、半日コースとするなど大筋を定め、もし結果がよければ次年度も継続したいとの意図がありました。なぜなら前年度の60年3月17日に同じところで観察会を実施し、当日雨天ながら一般参加者57名、指導員19名の観察会経験があったからです。

私が興正寺公園観察会を引受るにあたって次の条件を実行する事としました。

1. 年月第一日曜日
2. 半日コースとして、午前9時30分より正午頃までとする。
3. テキストは作成しない。
4. 下見は各自で自由に行う。
5. 担当指導員に対しては自然保護、自然愛護の枠内であれば内容の制約はしない。
6. 内容的にたのしくお面白い観察会を行う。
7. 新しい観察会方式を試行してもらう。
8. 新しい指導員の経験の場としたい。

観察会での基本マニアルは企画、運営により、観察場所決定、指導員協力要請、現地下見、打合せ、テキスト作成、P・Rによる参加者募集などがあります。それにより参加者にほぼ満足して頂ける内容の観察会が終了となります。しかし、実際には通り一辺倒の解説調で観察会が終了する場合も少なくないようです。そういった、過去の反省から興正寺公園の観察会では新しいミニ観察会方式で立案したものです。

2 背景

ミニ観察会の場所として設定された興正寺の由来は、貞享3年(1686年)天瑞円照和尚が高野山より八事に来て、熱田の八文字屋右衛門より八町四面の土地に草庵を結び律寺建立を志し、貞享5年に尾張藩主二代徳川光友公より帰依を受け諸堂宇を建立したと八事山興正寺由緒にあります。総本尊は大日如来ですが、特に五重塔は文化2年(1806年)に建立された総高30mの流線美と平均率の妙に勝れた東海地区唯一の五重塔です。

また、毎月5日と13日には縁日が開かれて参詣する善男善女が門前市をなすが如く見受けられます。

興正寺公園内の社寺林や諸堂をまわる「八事山を歩こう会」コースが設けられていますが、これは距離約3.5km所要時間は約40分です。

学習の小径やふるさとの森として整備されていて、この学習の小径にはコースにそって樹木の名札がつけられています。更にコースの途中には、「暖地広葉樹林」の説明板が掲げられております。

初心者でも気軽に散策できるように配慮されています。そうした時代的、宗教的な背景があって八事の杜が保護されてきたと考えられます。

3 実施

ミニ観察会は61年5月より、62年3月まで合計11回行われました。

- 1回目 5月4日 林のつくり 佐藤ほか5名。
森林の階層別にある樹木の名前を調べ、その作りや樹木相互の関係を調べました。
- 2回目 6月1日 葉の形 岩崎ほか10名
南の山を学習コースにそって歩く、植物の専門家が2名もいて、我々指導員よりも博学でありました。ヤブ蚊が多くかゆい思いをしたが植物によって葉の形状相違が理解できました。また、互生、対生、三出掌状複葉とか奇数羽状複葉などを観察。
- 3回目 7月6日 林の縁の植物 東ほか6名

当時は曇空で雨上りの林を中央道路に沿って道端より観察しました。リョウブ花、ウスノキの赤い実、白いシャシャンボの花などが観察され林縁の植物である特徴を調べました。

- 4回目 8月3日 林の観察 石田ほか2名

8月ともなると林の中はヤブ蚊が多くなりました。林の観察では学習コースを中心に暖地系広葉樹林などの樹木の特徴を調べました。アブラゼミやヒグラシのセミの鳴声が聞けましたが林の中は意外に涼しく感じました。

- 5回目 9月7日 林のはたらき 岩井ほか9名

都市公園内の樹林で林の持つ役割を考えながら観察を行いました。林のはたらきとしては防音効果、砂防効果、レクリエーション効果、保水効果などの意見が出ました。また、可憐なミズヒキの赤い花の色、キンミズヒキの黄色の花、ツクツクボウシの鳴声が聞けました。やはり、我々指導員にとって林のはたらきでは森林は自然界の生態をつかさどる基本の一つであると認識をしました。

- 6回目 10月5日 秋を探そう 佐藤ほか5名

当時は興正寺の縁日で参道には中高年者があふれ喧噪としていました。学習のコースを観察しましたが、林の中に入るときには寺院の方向からの騒音が届かず、ただ聞えるのはヒヨドリ、キジバトなどの野鳥の鳴声のみで静かなものでした。観察では落葉樹はやや紅葉を初め夏から秋へ季節の移り変りが見られました。道端のヨメナの花がかれんに咲いていました。

- 7回目 11月2日 落葉標本の作り方

岩崎ほか5名

落葉の同定法を観察会コースで行いました。初めは名札のある木で同定し、以後は参加者各自で自由に落葉を捨て歩き、集めた落葉を最後に各自アルバムに好きなように貼付け自分の作成した標本を説明しました。

このテーマのねらいは遊びの中で自然をみつめ、たのしみながら自然を理解して頂く事を主眼としました。

- 8回目 12月7日 冬をむかえる生物たち

塚本ほか5名

厳しい冬期を迎えた自然界で生き物たちはどのようにして冬越しをするのでしょうか、その状態を観察しました。落葉の下に潜むハチの一種、朽木の中で卵状の袋に入ったアリ、奥の院の板壁に無数の穴があったドロバチの巣など、また、植物ではアラカシの角形の冬芽、やわらかいムラサキシキブの裸芽、しかしループでよく見るとやわらかそうな細い毛が見られました。

- 9回目 1月4日 冬の林 佐藤ほか3名

正月松の内に観察会を行いました正月そうそう観察会でもあるまいとの意見もありましたが、かえって何かおもしろい、めずらしいものが見られるとの期待があってよかったです。

- 10回目 2月1日 八事の杜の探鳥会

斎藤ほか2名

探鳥会の開始が午前9時半と言う事でやや時間的に遅かったようです。しかし、カワラヒワの群が林の地面でなにやらエサをついばんでいるのが観察されました。メジロ、キジバト、シロハラ、アオジなど約13種程度の野鳥が観察されました。

- 11回目 3月1日 春を探そう

島田ほか1名

当日は外気温4℃で雪が少々舞う肌寒い朝でしたが参加者が少ないと予想で中止となりました。

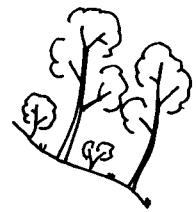
11回行われた観察会で一般参加者の定着者はわずか2名でしたが無事終了する事が出来ました。

4 最後に

今回のミニ観察会シリーズは参加人員数からみても本当の意味でミニ観察会がありました。一般参加者がたとえ1名でも来て下されば、それはそれで成功したと言っても過言ではないでしょうか。

実際的に年月定例で観察会を行う事は我々指導員にとって大変な負担行事であるけれども、これには各指導員の協力があってこそ運営出来る行事なのです。

現代生活に欠く事のできない自然とのふれあい、そこにはまだ我々の知らない素晴らしいなにかが残されているかもしれません。



行事案内

4. 26 (日) 名古屋支部 自然観察会 (猪高緑地)
9:30 名東区社会教育センター前集合
午前中 (塚ノ沢池、二次林の観察)
4. 26 (日) 尾張支部 月例観察会 (善師野)
9:00 名鉄広見線善師野駅前集合
4. 29 (日) 東三河支部 自然観察会 (葦毛湿原)
10:00 豊鉄バス岩崎バス停前集合
要昼食 (農地、二次林、湿原の観察)
5. 8 (金) 知多支部 室内例会 (映画観賞)
18:30 阿久比町中央公民館
5. 17 (日) 名古屋支部 観察会 (鈴鹿駅迦岳)
近鉄名古屋駅 7:30 集合 要申し込み
5. 20 (水) 名古屋支部 室内例会
「生物の進化について」
18:30 名古屋市教育館
5. 24 (日) 尾張支部 自然観察会 (善師野)
9:30 名鉄善師野駅集合 (予定)
5. 31 (日) 西三河支部 自然観察会 (子供の国)
10:00 愛知こどもの国中央管理棟集合
(二次林、三河湾を見る)
5. 31 (日) 東三河支部 自然観察会 (佐奈川)
10:00 飯田線三河一宮駅集合 午前中
6. 7 (日) 協議会 自然観察会 (面ノ木峠)
10:00 面ノ木峠駐車場集合 要昼食
(全国一斉ブナ林観察会)
6. 12 (金) 知多支部 室内例会
「池の微小生物」 (室内観察)
18:30 阿久比町中央公民館
6. 14 (日) 知多支部 自然観察会 (野間海岸)
10:00 野間大坊集合 要昼食
(砂浜の生物、海岸の植物)

〔お知らせ〕

○ 連絡窓口について

住所・電話番号等の変更の連絡、各種行事への申込み、その他どんなことでも連絡、問い合わせする場合は、次の方を窓口としますのでいずれかへ連絡して下さい。

- 事務局 県自然保護課保全担当
(052-961-2111 内線3692)
- 運営委員長 佐藤 国彦 (05617-3-5674)
- 各支部幹事

名古屋	岩井 隆史
尾 帳	松尾 初
知 多	降幡 光宏
西三河	水鳥 富人
東三河	鈴木 友之
奥三河	杉山 茂生

○ 指導員資格の登録について

昭和55年県民の森、昭和58年鳳来町学童農園で講習会を受けた方 (No.800~1,000、2,700~3,300) は登録更新手続は済みましたか。まだの方は早めに行ってください。書類等不明の点がありましたら連絡員へお知らせください。

○ 62年度の協議会研修会

62年度の協議会の行う研修会は次のように
詳細は後日御連絡します。御予定ください。

- 8. 23 植生調査研修会
- 10. 3~4 水生昆虫研修会 (於新城市)
- 10. 17~18 視察研修 (白山方面)
- 12. 12~13 指導員再研修

なお、11.21~23 に自然観察指導員講習会 (定光寺) を行います。関心のある方にお知らせください。

〔編集後記〕

春だけなわとなり、自然のある所ならどんな場所でも楽しい季節です。今年もいろいろな所でいろいろな発見をし、いろいろ考えてみたいものです。そして、時々は協議会の行事にも参加してください。自然についての全県的な組織として、協議会の果すべき役割はたくさんあるでしょう。何とか自然の為に、あるいは自然を大切に思う人にとって役に立つ会になりたいと思います。

とりあえず、この機関紙の作成に協力してやろうという方はいませんか、新年度らしく新しい機関紙にしていきたいものです。 (S)

編集事務局：名古屋市名東区香南 1の 101

県営住宅 7-511 (渡並喜一郎)